

東京・春・音楽祭 2021

にほんのうたX～東京オペラシンガーズ

合唱で聴く美しい日本のうた



曲目解説

わらべうた、大正時代の童謡

わらべうたは口伝えに受け継がれてきた子どもの唄で、遊びと一体になったものが多い。「ずいずいずっころばし」は、不思議な歌詞だが、一説には将軍家に献上するお茶を運んだお茶壺道中(行列)に関係する歌とも言われている。「花いちもんめ」は、二組に分かれて仲間の交換をする遊び唄で、都道府県によって様々な歌詞のバージョンがある。「あんたがたどこさ」の正式名は、肥後手まり唄(現在の熊本県にあたる)。しかし歌詞が熊本弁でないところから、関東地方でつくられた唄だとの説もある。「通りゃんせ」の歌詞は江戸時代に成立したとも伝えられ、その内容は関所に関係しているという説もある。作曲者にも諸説あるが、不可思議な歌詞とあいまって、どこかひやりとした怖さをも感じさせる。

「どんぐりころころ」は、大正時代につくられた唱歌。作詞の青木存義は、文部省在職中に文部省唱歌を数多く生み出した。日本の童謡・唱歌において最も代表的なもののひとつ。「花嫁人形」は、挿絵画家として名を馳せ、日本のアニメーションの草分け的存在でもあった落谷虹児が大正13年に発表した詩画に、ヴァイオリニスト・作曲家の杉山長谷夫が付曲した。その歌い出しはあまりにも有名である。「夕日」は、童謡詩人・葛原しげるの代表作だが、歌い出しは当初「きんきんきらきら」だったという。それを小学生だった長女のアドバイスにより「ぎんぎんきらきら」に変更したところ、インパクトのある歌になったという逸話がある。

昭和12年～24年に歌われた歌たち

「春の唄」は、昭和期の詩人・喜志邦三の詩に内田元が軽やかなメロディをつけ、昭和12年に国民歌謡として発表。月村光子の歌で大ヒットした。「蘇州夜曲」は昭和15年、李香蘭(山口淑子)主演の映画『支那の夜』の劇中歌。作詞の西條八十は、作曲・服部良一とのコンビで映画主題歌をいくつも手掛けた。「東洋のヴェニス」と謳われた蘇州の水郷地帯の雰囲気、メロディにもよく出ている。「うみ」は、昭和16年初出。唱歌に数々の名作を残した林柳波の作詞。まさに太平洋戦争が始まる年の歌だが、井上武士の曲にはそういう雰囲気を感じさせない雄大さがある。「鈴懸の径」は、戦時中の昭和17年に発表された流行歌。

作詞は西條八十門下の佐伯孝夫、そして作曲の灰田有紀彦の弟・灰田勝彦の歌でヒットした。この年にはミッドウェー海戦で日本の戦局も一つの転機を迎えている。「**リンゴの唄**」は、松竹の映画『そよかぜ』（昭和 20 年 10 月公開）の主題歌・挿入歌として発表された。作曲は松竹の専属として活躍した万城目正、作詞は詩人・サトウハチロー。本曲が戦後のヒット曲第 1 号となった。「**青い山脈**」は、これも西條八十と服部良一のコンビによるもの。石坂洋次郎原作の映画『青い山脈』の主題歌として昭和 24 年に発表され、藤山一郎の歌で大ヒットした。戦後まもない青春の姿を明るく描いている。「**長崎の鐘**」は昭和 24 年、長崎医科大学の医師だった永井隆が自らの被爆体験を綴った『長崎の鐘』をモチーフにしている。作詞・サトウハチロー、作曲・古関裕而、藤山一郎の歌で大ヒットした。サトウハチロー自身も、広島原爆で弟を亡くしている。